

266号

8月例会のお知らせ

- 日時 : 8月28日(日)
場所 : * 越前市から相乗りしていく人
集合場所 府中町屋倶楽部 9時集合
* 直接現地に行く人
現地集合 10時半頃に北谷町小原地区
- 内容 : 勝山市北谷町小原地区の見学

赤兎山の登山道入口にあたるこの地区は、勝山ジオパークと白山国立公園エリアの属する豊かな自然環境に恵まれた山村ですが、冬は豪雪地帯で、現在は一世帯一人しか住んでいない超限界集落です。

■連日炎暑厳しく、夏真っ盛りという印象が強いのですが、8月7日に既に二十四節気の立秋を迎えていますので、新暦の8月は秋。今挨拶状を出すのであれば残暑お見舞いになります。

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(古今集)と、昔の人は繊細な神経で季節の移ろいを捉えていたようです。毎朝アサガオの花が目を楽しませてくれています。朝顔は夏の内から咲き始めますが、人がまだ寝ている明け方にひそかに開くこの花の風情に、昔の人は秋の気配を感じたのでしょうか、初秋の季語になっています。今は朝顔に色々な色がありますが、蕪村の「朝がほや一輪深き淵のいろ」の句のように、朝顔と言えば藍か紺色を指していたようです。『万葉集』第八巻に山上憶良の「萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝がほの花」と、秋の七草を詠んだ歌がありますが、この「朝がほ」は、桔梗だとされていますし、木槿と混同しているものも見られます。

■例年8月は、活動が止まるほど暑いのと、お盆もありますので、例会はお休みにしていますが、この小原地区に福井工大吉田研究室の学生たちが作業に入るのが8月中だけです。28日に例会を行うことにしました。

■北谷町小原には明治24年には93戸の家屋が存在して、535人が生活していた記録があるそうです。ところが国内有数の豪雪地帯であることや、就業問題などから、急速に過疎が進み、現在は家屋が残っているのは30戸ほど。住んでいるのはたった1人だけだそうです。この地域には滝波川が侵食した傾斜地に明治時代に建てられた特徴的な古民家が残されているとか。そういう集落の調査に訪れた福井工大の吉田純一教授は、2006年からゼミ生たちと地区に残る古民家の修復を始められました。学生たちは夏休みに泊まり込みで修復作業を続け、これまでに相当数の家屋の修復を終えています。また古民家の再生のみならず、耕作放棄地での稲作、かんじきでのトレッキング体験、キノコ狩りなどのエコツーリズムを企画し、超限界集落だった小原地区に生き生きした風を吹き込んでおられます。これらの企画に国外からの参加者も多くなり、今では年間の交流人口は1,000人を超えるまでになっているそうです。ここに残る古民家は「寒さ対策のために建物が土蔵のように土壁で覆われている。県内では珍しい建築」と、吉田先生はおっしゃっておられます。ここはミチノクフクジュソウ、リュウキンカの群生地でもあります。